

**堀 義貴 (ほり・よしたか) 先生**

株式会社ホリプロ 代表取締役会長兼社長  
 社団法人日本音楽事業者協会 常任理事

1966年6月20日生まれ、東京都出身、O型。

1989年、成蹊大学 法学部政治学科を卒業し、㈱ニッポン放送に入社。

1993年、同社を退社し、㈱ホリプロに入社。

1996年6月、取締役メディア事業本部制作四部部長に就任。

1997年9月、同社東証二部上場。

1997年10月～、取締役制作・宣伝事業担当として、ホリプロの宣伝全般、音楽原盤制作、レーベル業務を統括する。

1999年6月～、取締役プロダクション・制作・宣伝事業担当となり、マネジメント部門、ファンクラブも併せて担当する。

2000年6月～、常務取締役に就任し、プロダクション・制作・宣伝事業を担当する。

2002年6月～、代表取締役社長、COO執行役員に就任。宣伝本部 兼音楽事業部 兼エデュテイメント&HIA担当。2002年9月、同社東証一部上場。

2004年4月、代表取締役社長、COOに就任。2008年6月～、代表取締役会長兼社長、CEOとして現在に至る。

団体役員歴：1999年	～	特定非営利活動法人肖像パブリシティ権擁護監視機構理事
2003年		経済産業省 コンテンツ産業国際戦略研究会委員
2003年5月	～	日本映像事業協同組合理事
2005年6月	～	社団法人日本音楽事業者協会常任理事
2005年12月	～	実演家著作隣接権センター運営委員
2006年9月	～	総務省 情報通信審議会専門委員

**《講義概要》**

総合マネジメント企業、株式会社ホリプロの最高経営責任者として、業界をリードする堀義貴氏が、エンタテインメント産業についての講義を行った。

講義ではまず、ホリプロの幅広い事業を紹介し、総合マネジメント企業が目指すものについて説明。その後、事前に集まった学生の質問に答える形で、エンタテインメントの現場を統率する立場から、エンタテインメントの定義や問題点などを示した。またその中で、歴史を知ることや英語を学ぶことの重要性にも触れながら、専門性だけが必要とされる世界ではないことを学生に示し、「無知の知」や「脇役も大切な“共演者”と考えること」の重要性を伝えた。

さらに、ホリプロの新卒採用に対する考え方や求める人物像などを説明し、今後社会に出ていく学生に対して、就職にあたって考えるべき課題を提示した。

## 〈受講生の感想〉

はじめの映像で、ホリプロの事業の大きさに驚きました。また、お話の途中で「人間の感情（五感）を刺激するものを全てつくる」というホリプロの方針をうかがったのですが、総合マネジメント企業として素晴らしい考えだと思いました。ホリプロの就職面接の話も伺えてとても参考になりました。「ふんばる力」を学生のうちに身につけなければならないと思いました。

立命館大学・産業社会学部・2 回生

お話の一番最後に、エンタテインメント産業に関わるならば日本のことや世界の歴史についてもっと知るべきだとありました。エンタテインメントとは関係なさそうなことだからそうおっしゃられた時にびっくりしました。でもそう話された理由を聞いて納得しました。昔の歴史と今はつながっているんだと考えて、今後勉強していきたいと思います。

立命館大学・産業社会学部・1 回生

エンタテインメントは確かに大量生産できるものではなく、機械的なものではないと思います。先生がおっしゃった通りに、人々の感情にアプローチし、何らかの感情を呼び起こすことに存在価値があるのだと共感しました。

京都女子大学短期大学・2 回生

“むずかしいものをかたんにして、かたんなものを深く、深くしたものを楽しくする。”むずかしいものをかたんにするには頭がいる。かたんなものを深くするにはアイデアがいる。深くしたものを楽しくするにはパフォーマンス力がある。すごく考えたい言葉です。

成安造形大学・造形学部・3 回生

今日のお話で印象に残っているのは、コンテンツについてです。インターネットの普及で嘆かれている点も少なくありません。しかし、インターネットがあるからこそ日本の文化が外国に広まり、また日本人としてもその文化を再確認しなければならないといったところは、自分も考えさせられました。

立命館大学・産業社会学部・1 回生

堀先生が、無知の“知”というお話をされていて、自分は少し傲慢だったのかなと感じました。何でも知っている訳ではないけど、知ったような気になっている部分が結構あった気がしました。あと、自国の文化や芸能について全く知らないという事を今日知れました。今日の講義の中で一番心に残ったのが、最後におっしゃっていた“脇役に目を向けない主役は成功しない”という言葉です。

立命館大学・映像学部・2 回生

